

# 外国人が見た日本の居住空間

なす さとし  
那須 聖

東京工業大学 環境・社会理工学院 建築学系 教授

かわの えりこ  
川野 江里子

構築環境・環境心理学 研究者

## 1 序：日本の居住文化の経験

### 1) 海外居住者による日本居住

異なる文化的背景を持つ人にとって、世界はどのように見えるだろうか。グローバル化が進んだ今日において、直接の経験だけでなく、書籍やSNSなどのメディアを通して、異国を経験する機会が多い。一時の旅行やメディアを通じた経験においては非日常として、あくまで異なる文化という認識を持つ場合もあろう。一方で、異なる地域において長期的に暮らす状況においては、異国の居住文化を自身のよく知るそれと比較するだけでなく、その居住文化の中で生きることを選択したり、違和感を感じたまま過ごすことが考えられる。本稿では、日本の居住空間という異なる文化圏の環境に触れた人がそれをどのように認識・理解し、実践し、再表現するかについて論じる。

歴史的に日本の居住空間は多くの外国人によって紹介されている。例えば、大森貝塚の発見と発掘で知られる動物学者のエドワード・モースは1877年以降の来日生活における経験を基に1885年に“Japanese Homes and Their Surroundings” (邦訳『日本の住まい 内と外』ほか)を出版している<sup>1)</sup>。そこには当時の日本家屋の特徴が詳細に記されており、同時代のアメリカにおける豊かさや趣味のよさの関係とは対照的な、とりわけ簡素さの中にある豊かさや感銘を受けていたことがわかる。本書の冒頭では日本の住居がアメリカのそれと比べ、無彩色であり、薄い外壁や障子、少ない内壁など「ない」ことを指摘しているが、それが好意的な評価へとつながっていく。一方で床

座については当初、困難を感じていたようだが、後にこれにも適応している。加えて、ヨハネス・ライン<sup>2)</sup>によるプライバシーに欠ける日本の住宅という評価に対して、野蛮さゆえに必要とされるプライバシーが日本人においては必要ないことを洞察している。同様に日本建築の簡素さに美点を見出した建築家にブルーノ・タウトがおり、日本の様々な場所への訪問と高崎の洗心亭での2年間にわたる生活での気づきを見ることができ<sup>3)</sup>。そのほかにも外国人の多くの著作において日本の文化や居住空間の評価を知ることができ、日本人による文化論<sup>4)</sup>や自身の居住空間の認識と比較してみるとよいであろう。

### 2) 住宅にみる日本の居住空間に対する眼差し

このような日本の居住空間を経験した外国人による著作において、文とスケッチによる記述と、生活の中での心の変化を読み取ることができる。これらの著作に表された経験は2次的な影響として日本の居住空間の解釈としての空間創造として現れることもある。モースの著作を手に入れたアメリカの建築家にグリーン兄弟がいる。彼らの中でも特に有名なのが南カリフォルニアのパサデナにあるキャンブル邸(1908)であり、深い軒の屋根、木組みの表現、当地の温暖な気候を活かした屋外の生活空間であるスリーピングポーチなど、「究極のバンガロー」と呼ばれる特徴がよく現れた住宅である。この住宅はツアーを通して体験することができるが、その中で日本の建築文化の解釈としての評価を知ることでもできる。グリーン兄弟は日本を訪れることはなかったが、先のモースの著

作を通して日本の住宅の詳細を知ったようである。手元にある現地調査でのインタビュー記録によれば「ここに見られるデザインの影響は、アメリカ人の想像力を通して日本の理念といえるだろう」とあり、異国の居住空間とその文化の経験が著作と建築家を通して空間に翻訳された姿を見ることができる。

### 3) 暮らしに取り組む経験と創造

日本を訪れる外国人にとって日本の居住空間は異なる文化圏のものであるかもしれないが、人間の居住文化として普遍的なことと特異的なことの両面があるだろう。これまで取り上げた例のように、それらを自らの心身によって理解し、暮らしに取り組む経験もあれば、空間を改変又は創造することで文化の形成に関わっていくこともあり得る。以降では東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識について、その選択から認識の変化に至るまでを質的調査に基づいて論じる。

## 2 東京在住の外国人の日本の居住空間の認識

### 1) 日本の住居の選択基準

日本に居住する外国人の現在の居住空間の認識を明らかにするために、2019年9月から11月にかけて東京に在住する20代から70代の外国人30名を対象として質問紙調査を実施した<sup>5)</sup>。調査対象者の性別はほぼ同数で、出身地域はアフリカを除く五大州地域からの出身者で構成される。

住居の選択基準について自由記述で得た回答から住居選択の基準となる項目を抽出し、得られた30項目を四つの大項目「予算」「周辺環境(治安、アクセス、近隣の雰囲気)」「建物と空間(物理的環境、空間の雰囲気・印象)」「選択権なし」として整理した。回答者の選択基準はこの4項目の組み合わせで構成されており、六つの選択基準のタイプに分類した。

居住空間の認識について、居住空間を開放的と認識している人は30名中18名であり(図1)、その

理由としては、「光(自然光)が入る」、「明るい」といったものが多く挙げられた(図2)。一方、開放的でない理由には「部屋が狭い」「景色がない」が挙げられた(図3)。日本特有の建築空間要素として間仕切りやこたつなどの可動式家具については、「便利」「快適」「空間を活用」の肯定的な評価とともに「出し入れが面倒」「必要ない」との意見があり(図4)、沓脱習慣については、「よい習慣」との回答が20名を超えていた(図5)。このように異なる文化的背景を持つ外国人の日本の住居の選択基準や認識に大きな偏りはなく、日本の空間活用や沓脱習慣について概ね肯定的に捉えて

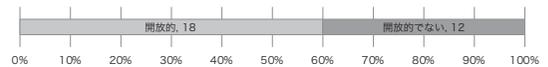


図1 居住空間が開放的かどうか n=30(人)

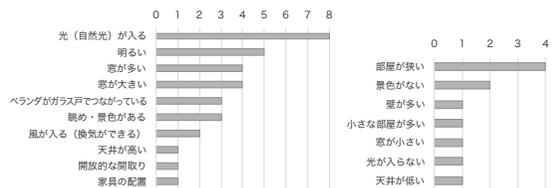


図2 開放的な理由 n=18(人)



図3 開放的でない理由 n=18(人)

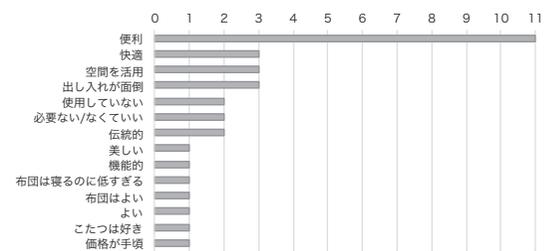


図4 可動式家具/間仕切りについての認識 (n=30、自由記述)(人)



図5 沓脱習慣についての認識(n=30、自由記述)(人)

いることが分かる。

## 2) 居住空間の選好 図式形成の構造

質問紙調査の結果を基に、現在の居住空間の認識と来日後の認識や住まい方の変化について探るために、質問紙回答者のうち出身国と世代の異なる男女6名に2019年11月から2020年2月にかけてインタビュー調査を実施した<sup>6)</sup>。

居住空間の認識について、日本の居住空間への移行に伴う住まい方の状態として以前と変わらない「不変」と日本居住後に変化した状態の「変化」を起点に日本の居住空間における「住まい方の対応」を分類した。抽出した6種の対応を表1に示す。これらの観点を基に調査対象者の発言を整理する。発言の概要は図6のとおりである。

**維持：【沓脱習慣】** 自国でも家で靴を脱いで生活していたという人が複数確認できた。日本でも従来の沓脱習慣を維持していることが推察される。また、家を清潔に維持できる機能的な利点に加え、玄関を屋外と室内の心理的な区切りとして認識している。**【床座】** 来日前から配偶者の影響で床に座る習慣を得ていたため、来日後に特に床座生活について変化はない。**【室内装飾】** 以前の居住国から絵画やアート作品を持参し、日本の居住空間でも継続して飾るケースが

移行に伴う住まい方の状態	住まい方の対応	過去の居住空間との類似	経験のない居住空間の受け入れ	実態としての住まい方
不変	維持	○	—	これまでの住まい方を維持
	拒絶	×	×	これまでの住まい方を維持
変化	新規	×	○	日本の居住空間に適應する住まい方を積極的に構築
		×	○	これまでの住まい方の意味内容を基に日本の居住空間で代替可能な住まい方を見出し積極的に構築
	代替	×	×	日本の居住空間に即した住まい方をやむなく構築
	諦観	×	×	日本の居住空間に即した住まい方にやむなく従う

表1 日本居住後における「住まい方の対応」

あり、自分のルーツを象徴するような色使いや宗教的な絵画から旅先の思い出の品に至るまで多岐にわたっている。**【外部とつながる感覚】** 以前から部屋でくつろぎながら、街の様子、人や車の動きを眺めるのを好み、東京でも同じことをしている。

**拒絶：** 該当する発言は確認できなかった。

**適應・新規：【空間活用】** 畳の部屋や、床座の生活、引き戸式の窓など、狭いながらも空間を広く使えるような日本の居住空間の特質を評価し、布団や可動式家具を使用した生活を実践している。**【間取り・設備】** 空間活用と同じく、よく考えられた日本の機能的かつ効率的な間取りや建具、水回りの設備等を評価している。**【畳】** くつろぐ場所として、感触や匂いなど好意的に評価し活用している。**【沓脱習慣】** 外出・帰宅

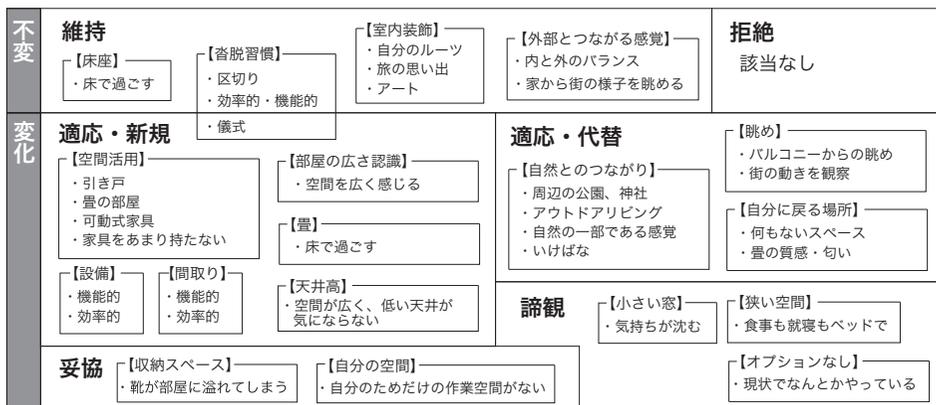


図6 日本居住後の居住空間の認識と住まい方一発言の分類

の沓脱にまつわるルーティーンが儀式のよう  
気に入っている。

**適応・代替：【自分に戻る場所】**現在の居住空間には一人で内省する空間はないが、自国では自分の部屋やバルコニーがそういう場所だった。日本居住後に旅館で和室に宿泊し、必要最低限のもので構成された自然の香りのする畳の部屋で、無心になりリフレッシュする経験を得て、時折旅館に泊まるのを楽しみにしている。**【眺め】【自然とのつながり】**幼少期の家で中庭をアウトドアリビングとして使用していたケースでは、高層階のバルコニーでくつろぎ、自然の移ろいなど眺めを楽しむ時間を持ち、日本の居住空間で代替可能な外部空間でくつろぐ住まい方を実践している。

**妥協：【収納スペース】**玄関の造作下駄箱が小さいため、自ら靴用収納を購入し部屋に置いているが、部屋がワンルームのため、さらに狭くなる。**【自分の空間】**日本の居住空間では自分のスペースがなく、作業が必要な時は他の部屋を借りる。

**諦観：【小さい窓】**初めて日本の家の窓の大きさを見た時に、気分が沈んだ。**【オプションなし】**ほかに選択肢がなかったため、今の居住空間で何とかやっている。**【狭い空間】**部屋がワンルームで、すべての行動・行為がベッド周辺で集約されて集中しにくい、仕方がない。

日本の居住空間に適応する住まい方を積極的に構築している**適応・新規**では、日本の居住空間の機能性や快適性に価値を見出していることが窺える。**適応・代替**では、これまでの住まい方の意味内容を、日本の居住空間で代替可能な住まい方を見出していることがわかる。このように、これまでの居住経験や文化的背景で形成された個人の価値判断を含む認知構造に見合う住まい方においては、積極的にその居住空間に適応する住まい方を構築しているのではないかと考えられる。

### 3 「異なる」の先にある居住文化の認識と実践

異なる居住文化や居住空間はそこを訪れた人に新たな視点をもたらすといえるが、その人々が元来持っていた文化と当地の文化を融合させることで新たな暮らしを実践することは、その場所の新しい居住文化とその空間をつくることになる。これまで述べてきたように、人は異国の文化に触れたとき、それを単に「異なる」としたまま静的に生きるのではなく、区別や同化、介入をすることで動的に認識し、暮らしを実践している。その場所の暮らしの中で何を認識するのか、どのように変化するのか、さらに自らの行動を変化させるのか、周囲の環境を変えていくのか、そういったインタラクションが異文化における居住空間との関わりの中で生まれている。このことは日本人・外国人という区別だけでなく、共有された文化の差異だけでもない。異なる人々の交流による融合・変化の営みとして考える必要がある。

#### (参考文献)

- 1) Morse, Edward S., Japanese Homes and Their Surroundings, Harper & Brothers, 1885. 邦訳として上田篤・加藤晃規+柳美代子訳(1979)『日本のすまい 内と外』鹿島出版会、斎藤正二+藤本周一訳(2004)『日本人の住まい』八坂出版がある(それぞれの底本は1886年のTicknor & Company版)
- 2) Johannes Justus Rein(1853-1918), ドイツの地理学者、日本に関する著書として、Japan nach Reisen und Studien im Auftrage der Königlich Preussischen Regierung, 1881/1886
- 3) ブルーノ・タウト著・篠田英雄訳(2008)『日本の家屋と住まい』春秋社(1950年出版のブルーノ・タウト著作集第五巻を底本とする)
- 4) 例えば系譜的に扱ったものとして、大久保喬樹(2003)『日本文化論の系譜』中公新書
- 5) 川野江里子・那須聖(2023)「外国人の持つ日本の居住空間の図式に関する研究(その1):東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識」『日本建築学会計画系論文集』Vol. 88, No. 810, pp. 2250-2260, (一社)日本建築学会
- 6) 川野江里子・那須聖(2024)「外国人の持つ日本の居住空間の図式に関する研究(その2):外国人の東京の居住空間における住まい方の変化の対応と居住空間の選考に関わる認知構造の上位概念からみる居住空間の図式形成の構造」『日本建築学会計画系論文集』Vol. 89, No. 820, pp. 985-996, (一社)日本建築学会